

茨城県女性プラザ レイクエコー

調査日：2011年7月30日

東日本大震災による茨城県の被害は、死者・行方不明者 25 人と人的被害は他の被災県に比べれば少なかったが、住家被害は全半壊合わせて 23,151 棟にも及んだ（9月30日現在^{*}）。레이크エコーのある鹿行地区は、銚田市、神栖市、鹿嶋市と続く長い海岸線を持つため、特に津波の被害を大きく受けた。被害が点在しているため、震災前と変わらない日常を送っている人と、日常が一変してしまった人が隣り合わせにいる状態が続いている。레이크エコーは丘の上にあり断水が長引き、また設備にも一部破損が生じたためその修繕も兼ねて3月いっぱいの休館を決定し、県内の多くの社会教育施設が被災又は避難所として利用されているなか、4月に再開した。

インタビュー対応者は、茨城県女性プラザ千ヶ崎高志課長と茨城県鹿行生涯学習センター下河邊高生涯学習課長。

1 発災時の状況

◆緊急避難場所として対応

発災時、茨城県女性プラザ（以下、女性プラザ）と鹿行生涯学習センター（以下、生涯学習センター）の複合施設である레이크エコーには、研修で 20～30 人の利用者がいたため、利用者全員を駐車場に避難させた。和室研修室の空調設備が破損し、そのまわりが水浸しになってしまった以外は、施設的には大きな破損はなかった。揺れがいったん収まったところで、利用者は帰宅していったが、레이크エコーが地域の避難所に指定されているためか、今度は近所の人々が避難して레이크エコーにやって来た。職員は水浸しになった和室研修室の処理に当たっていたが、急きょ、緊急避難所としての対応が必要になり、最終的に近所の一人暮らしの高齢女性 4 人と、夜中に鹿嶋市から避難してきた夫婦を宿泊させることにした。

余震が続いていたので、最初は駐車場にテントを張って雨風をしのぎようと思ったが、夜になりとても冷えてきたので、いつでも逃げ出せるように用意して、みんなでロビーで一晩を明かすことにした。発災直後から断水と停電が始まったが、見回りにきた消防団が発

^{*} インタビューについては7月30日に実施したが、被害状況については原稿執筆時の最新情報を掲載した。

【センター概要】

1987年、茨城県立婦人教育会館として開館。1997年に名称を茨城県女性プラザに改称すると同時に、県東地区を管轄する鹿行生涯学習センターを併設。茨城県女性プラザと鹿行生涯学習センターを合わせて「레이크エコー」の愛称で親しまれている。所管は茨城県教育委員会。財団法人茨城県教育財団が指定管理者として管理運営に当たる。収容人数86人の宿泊施設を備え、延床面積6,956㎡。事業は男女共同参画推進事業、ワーク・ライフ・バランス推進事業、ライフプランニング支援事業、人材育成事業の4つを柱に実施している。ただし、就労支援・相談に関する事業は県女性青少年課が所管する。職員数は21人。

URL <http://www.lakeecho.gakusyu.ibk.ed.jp/>

電機を置いていってくれたので、お湯を沸かし、一息つくことができた。

◆震災翌日以降の対応

레이크エコーに1泊した避難者は、翌日、行方市が避難所に指定した公民館に移っていたが、레이크エコーは破損箇所の点検などもあり、震災翌日から当面の間、休館とした。12日出勤できたのは、近くに住む一部の職員だけだったが、手分けして、利用が予定されている団体に当面休館する旨を伝えた。まだ電話がほとんどつながらない状態で、この連絡には多くの時間が費やされた。

発災後、県から、레이크エコーを福島県からの避難者を受け入れる施設の候補とすると連絡があり、財団法人茨城県教育財団（以下、財団）と協議の上、その対応に備え、また施設修繕も兼ねて3月いっぱい休館を決定した。結局、福島県からの避難者を受け入れる要請はなく、4月1日から、施設を再開した。

2 実施した活動

◆女性プラザの活動

もともと女性プラザと生涯学習センターは運営母体と同じ財団だということもあり、日ごろから連携しながら事業を行っている。今回も震災に関する事業を何か一緒にできないかと話し合っていたところに、急きょ県から、震災復興支援に関わる社会貢献活動プログラムを立ち上げて欲しいとの要請があった。레이크エコーと県内の生涯学習センター及び県の生涯学習課が集まって、それぞれの施設で少なくとも2本以上の事業からなる社会貢献活動プログラムを実施しようということになった。

레이크エコーでは、まず、女性プラザが企画した事業から始めた。5月21日に、県東地区PTA連絡協議会との共催で、男女共同参画推進事業の一環として、静岡大学教育学部准教授小林朋子さんによる「被災後の子どもの心のケア」と題した講演会を開催した。

茨城県女性プラザのプログラム

日時	事業名	対象	参加者数
5月21日(土) 午後1時～ 2時30分	男女共同参画推進事業：子育て世 代の応援講座 「被災後の子どもの心のケア」 講師：小林朋子（静岡大学教育学 部准教授）	・ 県東地区 PTA 連絡 協議会女性ネット ワーク委員 ・ 教育関係者 ・ 一般県民	212人
6月4日(土) 午後2時～ 3時	2011年レイクエコーボランティア 研修会 「被災地でのボランティア活動を 通して」 講師：岡見清（牛久市市民活動課 課長）、高校生ボランティア 2名	・ レイクエコー ボランティア ・ 高校生ボランティア ・ ふれあいサポート センター登録者	50人

女性プラザはもともと、2011年度の事業として県東地区 PTA 連絡協議会の中にある女性ネットワークという女性会員の組織を対象にした事業を予定していたので、それを震災復興関連事業として、公開で実施することにした。女性ネットワークのメンバーは全員子どもを持つ母親なので、大震災を経験した子どもの心のケアをテーマにした。この講演の際、会場では風評被害を受けている茨城産の農産物の販売も行った。また、静岡県内の小中学校で活用されている「災害後のこころのケアハンドブック」を講師の小林朋子さんの紹介で入手し、このときの参加者に配り、さらにこの後6月にやはり県内で実施された養護教諭研修会において参加した養護教諭にも配布した。

2回目は6月4日に、レイクエコーボランティアの研修会を兼ねて、被災地で支援活動を行ってきた人たちによる報告会を実施した。市民とともに東北の被災地支援に取り組んだ牛久市市民活動課の岡見清課長の報告や、液状化のひどかった潮来市でボランティアを経験してきた地元の2人の高校生による支援活動の報告に、参加者が熱心に耳を傾けていた。

◆生涯学習センターの社会貢献活動プログラム

女性プラザによる事業の実施を受け、生涯学習センターでは2つの柱を立てて社会貢献活動プログラムを実施することにした。1つは、レイクエコーボランティアのうち高校生を中心に、人材育成と被災地支援を実践していこうというもので、もう1つは被災した学校の児童生徒や保護者を対象に行う学校支援である。前者の目的で行われる事業が下表の②、⑤、後者の目的を持つ事業が③、④で、①は両方の目的を持つ事業として企画した。

鹿行生涯学習センターの社会貢献活動プログラム

日時	事業名	対象	参加者数
①6月18日(土) 午前10時～ 11時 午前11時 ～12時	【講演】「津波の被害を受けた鹿行地区の海岸線の現状について」 講師：人見英樹（日本プロサーフィン連盟理事） 【ワークショップ】	・サーフィン連盟 ・地域の人 ・レイクエコーボランティア ・高校生ボランティア	20人
②7月10日(日) 午後1時～	高校生ボランティア社会貢献活動 第1回海岸清掃	・サーフィン連盟 ・地域の人 ・レイクエコーボランティア ・高校生ボランティア	21人
③7月31日(日) 午後2時～、 午後5時～	学校支援作戦・復興支援演劇 「ボクらは真っ白な紙の上」 劇団プロジェクトヴァンガードX バンド・ウエスタンK	・鹿行各市の親子 ・高校生 ・一般県民	252人
④8月7日(日) 午後1時～	学校支援作戦・復興支援コンサート ヘルマンハーブ演奏会 島村敦子氏	・鹿行各市の親子 ・高校生 ・一般県民	117人
⑤9月11日(日) 午後1時～	高校生ボランティア社会貢献活動 第2回海岸清掃	・地域の人 ・レイクエコーボランティア ・高校生ボランティア	43人

◆人材育成と被災地支援の海岸清掃

茨城県の沿岸部は津波の被害を受けているため、海岸線が非常に汚れていた。この社会貢献プログラムの第1回目はその実情を知り自分たちにできることを検討するために、これまでずっと海岸清掃に取り組んできた、銚田市在住の日本プロサーフィン連盟理事人見英樹さんの講演とワークショップを実施した。その後、2回にわたり計64名の高校生及び一般ボランティアによる銚田市の海岸線の清掃活動を行った。

「炎天下、ボランティアが実にさわやかに活動し、自分たちの働きが人のため、地域のためになることを実感してくれた様でうれしかった。今回の参加者の中から社会貢献ができる人材が育って欲しい」と



海岸清掃活動の様子

下河邊生涯学習課長は期待する。

레이크エコーは、その沿革からも女性団体との結びつきが強かったが、メンバーが次第に高齢化して、次世代の育成にどう取り組むかという課題に直面していた。そんな状況下での震災であったので、「震災が活動のブレーキにならないように、むしろ震災を契機として若い人たちを取り込む事業のあり方を見つけ出していきたい」と、千ヶ崎女性プラザ課長は言う。

◆心のケア事業を実施

生涯学習センターの社会貢献活動プログラムのもう1つの柱である、被災した学校支援事業は、当初、被災した学校の花壇整備などへのボランティア派遣を考えていたが、そういった作業は地域の人たちで行っているため、5月21日に実施した講演会「被災後の子ども心のケア」を参考に、心のケア事業を展開することにした。実際、被災して使えなくなった小学校に通っていた子どもたちは4月の新学期から建物被害のなかった近くの中学校の空いている教室に間借りして授業を受けるという状況が続いていた。子どもたちはこれまで通っていた小学校の近くの広場に集まって、そこからバスで中学校に通うという毎日を送っている。「新しい環境に慣れるために必死でストレスと戦っている子どももいるはずで、そういう子どもたちに対しては、少なからず心のケアが必要だろうと思うし、同時に、毎日そういう子どもを見ている大人に対しても気持ちをリラックスさせるものが必要ではないか」と考え、演劇や演奏会による心のケア事業に行き着いた背景を下河邊生涯学習課長は語る。

◆震災後に広がる事業、増えた参加者

「震災の前と後では、레이크エコーで実施する事業の意味が大きく変わってきた」と、千ヶ崎女性プラザ課長は語る。例えば日本プロサーフィン連盟の人たちが取り組んできた海岸清掃の話がこのタイミングで聞くと、高校生たちは自分たちも行動しなければという受けとめ方をする。周囲の大人も彼ら彼女らの前向きな気持ちを積極的に応援しようということになる。「これまで必要性は痛感していたが、若い人たちにまで事業の対象をうまく広げられなかったが、震災を契機に事業が思いがけず広がってきた」と、千ヶ崎女性プラザ課長。

子どものストレスケアなど心の問題についても大変重いテーマなので、女性プラザではこれまではほとんど扱ってこなかった。「ニーズを的確に把握することで、県民にしっかり伝えることができ、さらにその問題に自分たちも取り組もうという人たちも出てきている」と千ヶ崎女性プラザ課長は続ける。茨城県では、震災被害が点在しているため、変わらない日常を送っている人と、日常が一変してしまった人が隣り合わせにいる状態が続いており、自分の周りで被災した人たちを見て支援活動に積極的に参加しようという人が増えている。実際、레이크エコーで実施する事業への参加者も5月以降、昨年度実績よりも多くなっている。

◆災害時における女性関連施設の役割

女性関連施設は、女性たちが集う場があるということが何よりも意味のあることだと、千ヶ崎女性プラザ課長は考えている。特に今回の様な大災害に直面した場合は、女性関連施設の持つ場が重要な役割を果たす。周囲の施設が避難所になったり、被災して使えない中で、레이크エコーは、唯一、自分の生きがいとしている活動を取り戻す場となり、活動を共有する仲間と出会う場となる。仲間と活動を行うに当たって、住民だけで、集う場所やかかる経費を確保して、その活動に最もふさわしい内容を用意することは難しい。레이크エコーの様な、県や、あるいは市町村が設置した公設の施設は、何か活動したい、仲間と出会いたいという住民の意欲を引き出し、活動しやすい環境を整えるということが、役割だという。「結局これが、地域活動に取り組める人材の育成につながると思う。その上で、女性プラザとして、その地域活動に参画する人の中に男女共同参画の視点が根づくことを促し、さらに地域活動を担える女性のリーダーを育成していくという視点を忘れないようにしたい」と、千ヶ崎女性プラザ課長は語った。

3 今後の活動

10月29日、30日に女性プラザと生涯学習センターが共同で、恒例の레이크エコーフェスティバルを開催する。今年は、震災後に実施した震災関連の事業を中心に展示や発表を行う。地元の小中学生や레이크エコーに登録する学習団体によるステージ出演や海岸清掃に参加した高校生による活動報告もある。また、この高校生たちはそれぞれの高校の文化祭等でもボランティア活動の発表をする予定だ。こうした活動自体が子どもたちの心のケアになるよう、また活動に関わるボランティア等の人材育成にもなるよう、레이크エコーは事業を展開していくことを目指している。「海岸清掃は1つの例にすぎない。地域に貢献できる人材を育てるということは、多様な分野で可能性がある。ただ、若い世代だけに、その先ずっと活動を継続していけるかが課題です」と下河邊生涯学習課長は最後に、若者を対象とする事業の難しさも語った。